

令和3年度

沖縄県立芸術大学大学院
芸術文化学研究科（後期博士課程）

シラバス

沖縄県立芸術大学大学院
〒903-8602 那覇市首里当蔵町1-4

90112	芸術表現総合比較研究 I	2 単位 通年	1・2	演習	芸術文化科学研究科 各指導教員又は担当教員
-------	--------------	------------	-----	----	--------------------------

■テーマ

芸術理論と実技の統合

■授業の概要

実技と理論の総合を目指すことを目的として設けられた科目である。芸術の題材、表現方式等について、創作・演奏・演出等の実際に則して総合比較研究を行い、芸術表現の本質と各ジャンルの特性を明らかにすることを目標とする。

博士論文作成をめざす学生は、自己の研究課題に関連する実技について指導を受けるとともに、専門分野の異なる研究者の指導・助言を受けることを通して、共同研究を行う。研究作品・研究演奏と博士論文の作成をめざす学生は、自己の研究課題やそれに関連する分野の学術研究について、他の教員の指導を受けることを通して、共同研究を行う。いずれの場合も、具体的な内容は指導教員がコーディネートするので、指導教員とよく相談して計画を立てること。

学生の研究課題によっては、芸術文化科学研究科担当教員以外の教員（非常勤講師を含む）の指導を受けることも可能である。

■到達目標

・自己の研究課題を充実させることのできる学習成果、研究成果をあげること。

■授業計画・方法

学生の研究テーマに沿って決定される授業、担当する教員または非常勤講師と、学生の指導教員または担当教員との共同により演習を進める。定期試験は実施しない。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

・学生の主体的な研究が求められる。

■成績評価の方法

-

■成績評価の基準

到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

コーディネートする指導教員が、指導に関与した各教員と協議の上、平常の当該研究への取り組みについて（50%）、またはレポート等の成果をふまえ（50%）、総合的に評価する。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書

特になし

□テキスト

特になし

□参考文献（作品等）

特になし

□参考資料

特になし

90113	芸術表現総合比較研究Ⅱ	2単位 通年	2・3	演習	芸術文化学研究所 各指導教員又は担当教員
-------	-------------	-----------	-----	----	-------------------------

■テーマ

芸術理論と実技の統合

■授業の概要

芸術表現総合比較研究Ⅰをすでに履修している学生を対象とする。

実技と理論の総合を目指すことを目的として設けられた科目である。芸術の題材、表現方式等について、創作・演奏・演出等の実際に則して総合比較研究を行い、芸術表現の本質と各ジャンルの特性を明らかにすることを目標とする。

博士論文作成をめざす学生は、自己の研究課題に関連する実技について指導を受けるとともに、専門分野の異なる研究者の指導・助言を受けることを通して、共同研究を行う。研究作品・研究演奏と博士論文の作成をめざす学生は、自己の研究課題やそれに関連する分野の学術研究について、他の教員の指導を受けることを通して、共同研究を行う。いずれの場合も、具体的な内容は指導教員がコーディネートするので、指導教員とよく相談して計画を立てること。

学生の研究課題によっては、芸術文化学研究所担当教員以外の教員（非常勤講師を含む）の指導を受けることも可能である。

■到達目標

- ・自己の研究課題を充実させることのできる学習成果、研究成果をあげること。

■授業計画・方法

学生の研究テーマに沿って決定される実技担当教員または非常勤講師と、学生の指導教員または担当教員との共同により演習を進める。定期試験は実施しない。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

- ・学生の主体的な研究が求められる。

■成績評価の方法

-

■成績評価の基準

到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

コーディネーターする指導教員が、指導に関与した各教員と協議の上、平常の当該研究への取り組みについて（50%）、またはレポート等の成果をふまえ（50%）、総合的に評価する。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書

特になし

□テキスト

特になし

□参考文献（作品等）

特になし

□参考資料

特になし

90228	比較美学研究A (奇数年度開講)	2単位 後期	1・2	講義	喜屋武 盛也
-------	---------------------	-----------	-----	----	--------

■テーマ

Form（形式）の理念史

■授業の概要

形式（form）という言葉は学術においてだけではなく社会の様々な場面でも登場するが、芸術を語るうえでも再頻出の言葉のひとつと言ってもよいであろう。しかし、この語の意味するものがあまりに広範に及ぶため、明確に捉えることは困難である。対応する英語Formを見ても明らかなように、眼前に展開される具体的な「かたち」と結びつくと同時に、極めて抽象的なものを言い当てようとする。本講義は、形式およびそれと深くかかわる言葉の概念史をたどることで、芸術思想の理解の一助とするものである。

■到達目標

- ・形式という語について西洋思想史という観点から理解し、説明することができる。

■授業計画・方法

講義形式で行う

- 1 ガイダンス／形式という語について
- 2 形式の歴史を語る困難性
- 3 古代の形式理論 1 詩と絵画
- 4 古代の形式理論 2 モルフェ、エイドス
- 5 古代の形式理論 3 エンテレケイア
- 6 中世・ルネサンスの形式理論 1 実体形式と美
- 7 中世・ルネサンスの形式理論 2 ディセーニョ
- 8 中世・ルネサンスの形式理論 3 素描と色彩
- 9 近代の形式理論 1 感覚と概念：モリヌークス問題を発端に
- 10 近代の形式理論 2 形式と内容
- 11 近代の形式理論 3 モルフォロギア
- 12 形式主義の系譜
- 13 構造主義とフォルマリズム
- 14 「象徴形式」再考
- 15 回顧と展望

定期試験は実施しない

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

- ・テーマに即した内容について、参考文献等を読んで、認識や思索を積み重ねておくこと。

■成績評価の方法

- ・レポートを課す（100％）

■成績評価の基準

- ・到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書

-

□テキスト

-

□参考文献（作品等）

- ・タタルキェヴィッチ「形式（美学史における）」荒川幾男ほか日本語版編集『西洋思想大辞典』平凡社、1990（開架参考130/Se19/1-5）
- ・加藤尚武『「かたち」の哲学』岩波現代文庫
- ・シモンドン『個体化の哲学』法政大学出版局

□参考資料

-

90229	比較美学研究B (奇数年開講)	2単位 前期 (集中講義)	1・2	講義	関村 誠(非)
-------	--------------------	---------------------	-----	----	---------

■テーマ

創造行為と世界観の美学

■授業の概要

人間と世界との関係の多様性を再考しつつ、創造行為と空間把握における美学思想にかかわる基本的な諸概念を検討して、芸術の創造や受容の機能と世界観とのかかわりを考察する。その上で、古代ギリシア思想や日本思想とも比較吟味していく。

■到達目標

“・美学の基本概念を理解する。
・理論的理解をもとに創造と受容の場における現代的意味を論理的に考察展開することができる。”

■授業計画・方法

“・美学の基本概念を理解する。
・理論的理解をもとに創造と受容の場における現代的意味を論理的に考察展開することができる。”

- 1 導入：感性論について
- 2 空間把握の多様性
- 3 環世界と芸術
- 4 模倣と再現の理論
- 5 〈うつし〉と現れ
- 6 仮面と顔
- 7 「内なる美」について
- 8 写実と抽象
- 9 現実と幻想
- 10 絵画と身体
- 11 アニミズムとテクノロジー
- 12 日本人と〈間〉の感性
- 13 日本的風土とギリシア芸術
- 14 「見ること」と「感じること」
- 15 まとめ・レポート提出

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

・授業で扱う概念を知識としてのみではなく、美的感性的経験の中でどのように位置づけられるかなどを含めてディスカッションも行います。
・授業で扱った内容を自分自身の感性的経験と比較しつつ反省する。

■成績評価の方法

レポート（50%）、平常点（50%）。平常点は授業への参加状況、ディスカッションへの参加やコメントペーパーの提出状況で総合的に評価。

■成績評価の基準

到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書

特になし。

□テキスト

授業中に資料を配付する。

□参考文献（作品等）

プラトン『饗宴』『国家』（プラトン全集）、プロティノス「美について」（プロティノス全集 第一巻）、ミシェル・アンリ『見えないものを見る カンディンスキー論』（法政大学出版局）、岸田劉生『美の本体』（講談社学術文庫）、和辻哲郎『風土』『古寺巡礼』（岩波文庫）

□参考資料
特になし

90242	日本芸術批評史研究A (奇数年度開講)	2単位 後期	1・2	講義	小林 純子
-------	------------------------	-----------	-----	----	-------

■テーマ

日本の芸術論と美術史

■授業の概要

日本の画論・芸術論を講読し、美術にまつわる価値の創造とその変化について考究します。また明確な史観を持って記述された画史を読み、史観の変遷や美術史における歴史叙述の方法について考えます。本年はテキストに狩野安信『画道要訣』、田能村竹田『山中人饒舌』、岡倉天心『東洋の理想』、柳宗悦『琉球の富』等を用いる予定ですが、受講生の専攻分野を考慮して変更する可能性があります。また各自一編の芸術批評を選び、それについて口頭で成果を発表し、さらにレポートを書いて学期末に提出してもらいます。

■到達目標

- ・日本の芸術論を批判的に読み、問いを設定することができる。
- ・文献資料、作品等を調査し、得た知識をもとに問いを解決することができる。
- ・自説を持ち、それを合理的に論述することができる。

■授業計画・方法

- 1 オリエンテーション、日本の画史・画論・芸術論について
- 2 狩野安信『画道要訣』、狩野派について
- 3 狩野安信『画道要訣』、狩野派の画論について
- 4 狩野安信『画道要訣』、狩野安信の絵画観について
- 5 田能村竹田『山中人饒舌』、文人画について
- 6 田能村竹田『山中人饒舌』、田能村竹田について
- 7 田能村竹田『山中人饒舌』、田能村竹田の絵画観について
- 8 岡倉天心『東洋の理想』、近代の芸術思想について
- 9 岡倉天心『東洋の理想』、岡倉天心について
- 10 岡倉天心『東洋の理想』、岡倉天心の芸術観について
- 11 柳宗悦『琉球の富』、民芸思想について
- 12 柳宗悦『琉球の富』、柳宗悦について
- 13 柳宗悦『琉球の富』、柳宗悦の沖縄芸術観について
- 14 発表の準備
- 15 口頭発表、質疑応答

定期試験は実施しない。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

- ・毎回授業で進捗状況を報告してもらうので、継続的に調査研究する時間をとること。

■成績評価の方法

平常点（20%）、口頭発表（20%）、学期末レポート（80%）で総合的に評価する。

■成績評価の基準

到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書

特になし

□テキスト

購読する文献を授業中に配布する。

□参考文献（作品等）

下記の参考文献は芸術学専攻と大学附属図書館が所蔵している。

安村敏信編『定本 日本絵画論大成 第4巻 画道要訣ほか』ペリカン社、1997年

高橋博巳編『定本 日本絵画論大成 第7巻 山中人饒舌ほか』ペリカン社、1996年

岡倉覚三著、隈元謙次郎ほか編『岡倉天心全集』平凡社、1979-1981年

□参考資料

-

90244 (90233)	東洋芸術批評史研究A (奇数年度開講)	2単位 前期	1・2	講義	金 恵信
----------------------	------------------------	-----------	-----	----	------

■テーマ

日本における東アジア近現代美術関連企画展の図録に掲載された論考を読む。

■授業の概要

1990年代以降、日本の主に国公立美術館で開催された東アジア諸地域の美術企画展の中で、国際美術文化交流企画の性格を持ち、複数の地域の専門家・研究者の学術論文が収められている図録の中から、学術的、批評眼のある論考を取りあげる。

■到達目標

・東アジア近現代とは、もっとも近い過去としての「東洋」である。その「東洋美術」は、まずは美術館の企画展という展示の場に並べられることで初めて不特定多数に鑑賞され、語られ、批評の対象になる。その記録である図録の論考をとおして、美術展示を中心に展開する批評的論点と言説を、リアルタイムの目線で考察できるようにする。

■授業計画・方法

1. 前提：美術館と美術展示 ― 国民国家という共同体の中の美術館
2. 東アジアの近現代という時代とそのイメージとしての美術
3. 1990年代以降日本国公立美術館におけるアジア近現代美術企画展
4. 『「戦場」としての美術館』第三章を読む―批評家と美術館のことを考える前提として
5. 「90年代の韓国美術から一等身大の物語」展（1996） 東京国立近代美術館など
6. 「還流 日韓現代美術」展（1995）愛知県美術館／名古屋市美術館
7. 「日韓現代美術展 自己と他者の間」目黒区美術館／国立国際美術館（1998）
8. 「アジアのキュービズム展―境界なき対話」展（2005）東京国立近代美術館など
9. 「「秘すれば花」東アジアの現代美術」（2005）森美術館
10. 「近代の東アジアイメージ」展（2009）豊田市美術館
11. 「福岡アジア美術トリエンナーレ」その歴史（1）
12. 「第5回福岡アジア美術トリエンナーレ」（2014）（2）
13. 「アジアをつなぐ―境界を生きる女たち 1984-2012」（2012）沖縄県立美術館・博物館など
14. 「官展にみるそれぞれの近代美術―東京・ソウル・台北・長春」（2014）兵庫県立美術館など
15. まとめ

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

配布資料と熟読してくる。

日頃美術展覧会を見て、作品について考えることを授業と並行して行う。おすすめの展覧会は随時知らせる。

■成績評価の方法

レポート70%・平常点20%・コメントペーパー10%で総合的に評価する。

■成績評価の基準

観点・基準 学習目標で挙げた視点で理解できたかと基準に評価する。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書

-

□テキスト

特になし。毎回教員作成の資料を配付する。

□参考文献（作品等）

取り上げる展覧会図録（担当教員の蔵書を閲覧可能にする）

朴昭炫著『「戦場」としての美術館―日本近代美術館設立運動／論争史』ブリュッケ、2012（本学芸術学図書資料室に蔵書予定）
金恵信著『韓国近代美術研究―植民地期「朝鮮美術展覧会」にみる異文化支配と文化表象』ブリュッケ、2005年（本学芸術学図書資料室に蔵書ある）

李静和編『残傷の音「アジア・政治・アート」の未来へ』岩波書店、2009（本学芸術学図書資料室に所蔵予定）

90246	日本芸術文化学A	2 単位 前期	1・2	講義	波平 八郎
-------	----------	------------	-----	----	-------

■テーマ

日本文学作品（『南方録 覚書』）の講読

■授業の概要

千利休が確立した茶の作法を伝えるとされる『南方録 覚書』を講読する。その際、茶の湯の理論を様々な芸術分野に適用できないか試みる。たとえば、茶の湯の「わび」という理念を文学や美術工芸の分野に適用できるかどうか試みる。（受講生の興味・関心に応じて講読作品を変更することがある。）

■到達目標

茶の湯の理念を通して、日本文学、その他の分野の芸術理念を理解する。

■授業計画・方法

『南方録 覚書』を逐条講読する。受講生は当該作品について授業中に自身の意見を発表する。また、受講生は分担してテキストを輪読する。なお、講読するテキストについては、受講生の専門分野を勘案して、受講生と協議の上変更することがある。テキストが『南方録 覚書』の場合、次のような流れで授業を進めていく。

- 1 オリエンテーション
- 2 茶の湯の心
- 3 手水鉢
- 4 利休の師匠
- 5 かなうはよし、かないたがるはあしし
- 6 露地に水を打つ
- 7 雪駄
- 8 わび茶の花は軽く生ける
- 9 禁花の歌
- 10 夜会にも白い花
- 11 夏は涼しく、冬は暖かに
- 12 暁の火相
- 13 暁に汲んだ水
- 14 暁会と夜会
- 15 前期まとめ・レポート提出

定期試験は実施しない。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

レポートは、それぞれ関心のあるテーマをテキストから選んでレポートする。

■成績評価の方法

平常点（50%）、レポート（50%）を総合的に判断する。

■成績評価の基準

到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献（資料）等

教科書

なし

テキスト

筒井紘一訳注 『利休聞き書き 「南方録 覚書」』（講談社学術文庫）

参考文献（作品等）

適宜指示する。

参考資料

適宜指示する。

90247	日本芸術文化学専攻B	2 単位 後期	1・2	講義	波平 八郎
-------	------------	------------	-----	----	-------

■テーマ

日本文学作品（『南方録 覚書』）の講読

■授業の概要

千利休が確立した茶の作法を伝えるとされる『南方録 覚書』を講読する。その際、茶の湯の理論を様々な芸術分野に適用できないか試みる。たとえば、茶の湯の「わび」という理念を文学や美術工芸の分野に適用できるかどうか試みる。（受講生の興味・関心に応じて講読作品を変更することがある。）

■到達目標

茶の湯の理念を通して、日本文学、その他の分野の芸術理念を理解する。

■授業計画・方法

『南方録 覚書』を逐条講読する。受講生は当該作品について授業中に自身の意見を発表する。また、受講生は分担してテキストを輪読する。なお、講読するテキストについては、受講生の専門分野を勘案して、受講生と協議の上変更することがある。テキストが『南方録 覚書』の場合、次のような流れで授業を進めていく。

- 1 後期オリエンテーション
- 2 雪の茶会の心得
- 3 雪の夜会の灯籠
- 4 茶室
- 5 不完全の美
- 6 名物の掛物
- 7 茶の湯における掛物
- 8 わび茶の料理
- 9 懐石の作法
- 10 茶壺の飾り方
- 11 捨壺
- 12 風炉
- 13 釣瓶水指
- 14 水指の用い方
- 15 まとめ・レポート提出

定期試験は実施しない。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

レポートは、それぞれ関心のあるテーマをテキストから選んでレポートする。

■成績評価の方法

平常点（50%）、レポート（50%）を総合的に判断する。

■成績評価の基準

到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書

なし

□テキスト

筒井紘一訳注 『利休聞き書き 「南方録 覚書」』（講談社学術文庫）

□参考文献（作品等）

適宜指示する。

□参考資料

適宜指示する。

90248	民族芸術文化学研究A	2単位 前期	1・2	講義	鈴木 耕太
-------	------------	-----------	-----	----	-------

■テーマ

琉球文学作品の講読と解釈

■授業の概要

琉球文化を表現するものの中から琉球文学について解釈方法を基礎的に学習する。琉球・沖縄の芸術には琉球語が密接に関わり合っており、前近代に至っては近世琉球の文化や、琉球語（とくに組踊・琉歌語）の解釈が必要不可欠である。本講義では、琉球語の表現を知る手だてとして、おもろさうし・琉歌・組踊を中心とし、さらに南島歌謡など基礎的に学ぶ。特に作品の背景にある人々の感情や、詠まれた（創作された）世界を捉え、一首・または一作品ごとに琉球語の読解、解釈、鑑賞を検討していく。なお、講読するおもろさうし・琉歌・組踊・南島歌謡などのジャンルについては、受講生の専門分野を考慮し、受講生と協議の上決定する。

■到達目標

おもろさうし・琉歌・組踊・南島歌謡など一つの作品を正確に解釈できるようになることを目指す。古典琉球語について、用例にあたり、その語が当該作品でどのような意味を担っているかを明らかに出来るようにする。作品一首の解釈・鑑賞へといたる道筋についてその方法を習得し、一首の鑑賞が出来るようになることを最終目標とする。

■授業計画・方法

各回とも、研究テーマを決め、学生による発表および教員による解釈を行う。

- 1 琉球文学概説
- 2 琉球文学研究史概説
- 3 テキスト講読「おもろさうし」巻一～巻十二を中心に
- 4 テキスト講読「おもろさうし」巻十三～巻二十二を中心に
- 5 テキスト講読「琉歌百控」乾柔節流より
- 6 テキスト講読「琉歌百控」独節流より
- 7 テキスト講読「琉歌百控」覧節流より
- 8 テキスト講読「組踊」「執心鐘入」第一場
- 9 テキスト講読「組踊」「執心鐘入」第二場
- 10 発表と鑑賞「おもろさうし」巻一～巻十二より
- 11 発表と鑑賞「おもろさうし」巻十三～巻二十二より
- 12 発表と鑑賞「琉歌百控」乾柔節流より
- 13 発表と鑑賞「琉歌百控」独節流より
- 14 発表と鑑賞「琉歌百控」覧節流より
- 15 本講義のまとめ

※定期試験は実施しない。レポートを課す。

必要に応じてパソコンによるプレゼンテーション、板書、音楽、映像、その他様々な資料を利用して講義を進める。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

履修にあたっては、事前に琉球文学の基礎知識、または基礎文献・辞典の活用方法（項目の引き方）などを予習しておくこと。たとえば『沖縄語事典』『沖縄古語大辞典』その他琉球語の辞典などである。また、先行研究として、池宮正治・玉城政美・波照間永吉などの著書をあらかじめ読んでおくことが望ましい。

■成績評価の方法

通常の授業発表（平常点50%）に加え、発表態度、発表レポート（50%）を元に評価を決定する。

■成績評価の基準

到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書

講義用レジュメや資料を配布する。

□テキスト

参考文献の中から適宜使用する。

□参考文献（作品等）

島袋盛敏・翁長俊郎『琉歌全集』（1968年・武蔵野書店）玉城政美『南島歌謡論』（1991年・砂子屋書房）外間守善『南島文学論』（1994年・角川書店）波照間永吉『南島祭祀歌謡の研究』（1999年・砂子屋書房）

□参考資料

国立国語研究所『沖縄語辞典』（1963年・大蔵省印刷局）沖縄古語辞典編集委員会編『沖縄古語大辞典』（1995年・角川書店）

90249	民族芸術文化学研究B	2単位 後期	1・2	講義	鈴木 耕太
-------	------------	-----------	-----	----	-------

■テーマ

琉球文学作品の講読と解釈

■授業の概要

琉球文化を表現するものの中から「琉球文学芸能論」について基礎的に学習する。前期に引き続き、詞章解釈を通じて、琉球語の表現やその特性を理解するために、琉歌・組踊を中心とした琉球芸能文学の作品から、作品の背景にある人々の感情や、詠まれた（創作された）世界を捉え、一首・または一作品ごとに琉球語の読解、解釈、鑑賞を検討していく。後期は前期に行った解釈に加え、琉球舞踊や組踊、または祭祀の場で歌われる作品についても言及し、文献だけでなく、観劇やフィールドワークなども加え、深化した発表を行うことを目的とする。

なお、講読するおもろさうし・琉歌・組踊・南島歌謡などのジャンルについては、受講生の専門分野を考慮し、受講生と協議の上決定する。

■到達目標

おもろさうし・琉歌・組踊・南島歌謡など一つの作品を正確に解釈できるようになることを目指す。古典琉球語について、用例にあたり、その語が当該作品でどのような意味を担っているかを明らかに出来るようにする。作品一首の解釈・鑑賞へといたる道筋についてその方法を習得し、一首の鑑賞が出来るようになることを最終目標とする。

■授業計画・方法

各回とも、研究テーマを決め、学生による発表および教員による解釈を行う。

- 1 琉球文学芸能論概説
- 2 琉球芸能史概説
- 3 作品鑑賞「琉球古典舞踊」（女踊・老人踊）
- 4 作品鑑賞「琉球古典舞踊」（二才踊・若衆踊）
- 5 作品鑑賞「組踊」朝薫五番より
- 6 作品鑑賞「組踊」「大川敵討」前半
- 7 作品鑑賞「組踊」「大川敵討」後半
- 8 テキスト講読「組踊」「大川敵討」前半
- 9 テキスト講読「組踊」「大川敵討」後半
- 10 表と鑑賞「琉球古典舞踊」（女踊）より
- 11 発表と鑑賞「琉球古典舞踊」（二才踊・若衆踊）より
- 12 発表と鑑賞「組踊」朝薫五番より
- 13 フィールドワーク（朝薫誕生の地、首里儀保・末吉宮など）
- 14 フィールドワーク（万寿寺・浦添中頭方西街道、玉城朝薫の墓など）
- 15 本講義のまとめ

※定期試験は実施しない。レポートを課す。

必要に応じてパソコンによるプレゼンテーション、板書、音楽、映像、その他様々な資料を利用して講義を進める。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

履修にあたっては、「民俗芸術文化学研究A」のシラバスで提示した内容に加え、琉球舞踊・組踊・年中行事（祭祀など）を実際に見聞することががのぞましい。毎回の講義に向けて、事前準備を欠かさないこと。

■成績評価の方法

通常の授業発表（平常点50%）に加え、発表態度、発表レポート（50%）を元に評価を決定する。

■成績評価の基準

到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書

講義用レジュメや資料を配布する。

□テキスト

参考文献の中から適宜使用する。

□参考文献（作品等）

「民俗芸術文化学研究A」の参考文献の他に、池宮正治『琉球文学芸能論』、矢野輝雄『組踊への招待』『組踊を聴く』などを参考文献とする。

□参考資料

国立国語研究所『沖縄語辞典』（1963年・大蔵省印刷局）沖縄古語辞典編集委員会編『沖縄古語大辞典』（1995年・角川書店）

90251	東洋芸術文化学研究A	2単位 前期	1・2	講義	森 達也
-------	------------	-----------	-----	----	------

■テーマ

東洋工芸史の探求

■授業の概要

世界の陶磁器の源流となった中国陶磁の発展史を、時代ごとに詳説する。その背景となった中国を中心としたアジアの歴史についても概説。また、中国陶磁と関係の深い青銅器、漆器、ガラス器、玉器、金銀器など中国工芸全般についても触れる。文献や写真だけでなく、陶片などの実物資料も活用する。

■到達目標

- ・中国陶磁の発展史の詳細を把握するとともに、中国工芸全般への理解を深めることを目的とする。
- ・中国陶磁史を通じてアジア工芸史全般を理解することにより、東洋美術史を理解するための基礎を身に着ける。
- ・実物資料を見る機会を設け、研究者として資料調査方法を身に着けることも目標とする。

■授業計画・方法

- 1 オリエンテーション、中国の風土と歴史
- 2 中国陶磁史概説
- 3 新石器時代の土器
- 4 商周時代の土器と原始青磁
- 5 秦・兵馬俑と漢・兵馬俑
- 6 漢時代陶磁の発展
- 7 魏晋南北朝時代の陶磁
- 8 北朝から唐時代の鉛釉陶器の発展と白磁の誕生
- 9 晩唐の中国陶磁と海外輸出
- 10 青磁の発展－越州窯、耀州窯、汝窯－
- 11 青磁の発展－南宋官窯、龍泉窯－
- 12 白磁の発展－邢窯、定窯、景德鎮窯、徳化窯－
- 13 青花磁器の誕生と発展（景德鎮）
- 14 青花磁器と五彩磁器の展開（景德鎮）
- 15 中国貿易陶磁、授業統括

※ 定期試験は実施しない。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

中国史の概説書や中国陶磁史の概説書に目を通してもらいたい

■成績評価の方法

平常点40%、レポート60点で評価を行う。

■成績評価の基準

到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。芸術文化学研究科（博士課程）の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書

なし

□テキスト

資料は講義中にプリントを配布する。

□参考文献（作品等）

講義中に紹介する。

□参考資料

—

90252	東洋芸術文化学研究B	2単位 後期	1・2	講義	森 達也
-------	------------	-----------	-----	----	------

■テーマ

東洋工芸史の探求

■授業の概要

アジア各位の陶磁器の発展史を、地域ごと、時代ごとに詳説する。その背景となったアジアの歴史についても概説。また、陶磁器と関係の深い青銅器、漆器、ガラス器、玉器、金銀器など工芸全般についても触れる。文献や写真だけでなく、陶片などの実物資料も活用する。

■到達目標

- ・日本を始めとしたアジア各地（中国を除く）の陶磁の発展史の詳細を把握するとともに、工芸全般への理解を深めることを目的とする。
- ・陶磁史を通じてアジア工芸史全般を理解することにより、東洋美術史を理解するための基礎を身につける。
- ・実物資料を見る機会を設け、研究者として資料調査方法を身に付けることも目標とする。

■授業計画・方法

- 1 オリエンテーション、アジアの風土と歴史
- 2 日本 原始・古代
- 3 日本 中世（前期）
- 4 日本 中世（中期）
- 5 日本 中世（後期）
- 6 日本 桃山
- 7 日本 近世
- 8 日本 近・現代
- 9 日本 琉球陶磁
- 10 韓国 原始・古代
- 11 韓国 高麗時代
- 12 韓国 朝鮮時代
- 13 東南アジア
- 14 西アジア
- 15 ヨーロッパ、授業総括

※ 定期試験は実施しない。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

東洋史・日本史・西アジア史の概説書や陶磁史の概説書に目を通してもらいたい。

■成績評価の方法

平常点40%、レポート60点で評価を行う。

■成績評価の基準

到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。芸術文化学研究科（博士課程）の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■教科書・参考文献（資料）等

教科書

なし

テキスト

資料は講義中にプリントを配布する。

参考文献（作品等）

講義中に紹介する。

参考資料

—

90250	民族芸術学特論	2単位 後期 (集中講義)	1・2	講義	石岡 良治 (非)
-------	---------	---------------------	-----	----	-----------

■テーマ

芸術からポピュラー文化に至る「イメージ制作」と人類の関わりを捉える

■授業の概要

民族学・人類学的知見の蓄積により、人類の文化的営みにおいて「イメージ」が果たす役割の重要性が広く知られるようになってきている。造形芸術がイメージ制作 (image making) の観点から捉え直され、主としてヨーロッパや東アジアなどを対象とした「美術史」についても新たな光が投げかけられている。前近代における「民衆芸術」への関心や、近現代におけるポピュラー文化への関心などが、芸術学における重要な問いを構成するようになったのも、こうした文脈から理解することができるだろう。本講義はそうした状況を捉えるために、現代の様々な理論を概観した上で、民族学・人類学的観点から諸星大二郎や岩明均などのマンガ作品、高畑勲や宮崎駿のアニメ作品などを読解する。そのさい、「キッチュ」「マンガ」「絵馬」といった多様な対象に取り組んだ日本の美術批評家、石子順造の活動を手がかりにしつつ、彼が最晩年に「丸石神」への関心に至った歩みを批評的に再検証する。芸術的創造の問いを身近な場面で考えていきたい。

■到達目標

民族誌・人類学やポピュラー文化などを通じた「イメージ」の役割の広がりについて学び、人類と「芸術」の関わりについて各自の関心と結びつけて理解を深める。

■授業計画・方法

- 1 インTRODクシヨン：イメージと人類
- 2 ドイツ・オーストリア芸術学の現代的意義：ウィルヘルム・ヴォリンガー
- 3 ドイツ・オーストリア芸術学の現代的意義：エルンスト・ゴンブリッチ
- 4 ジル・ドゥルーズの芸術学と現在のイメージ人類学
- 5 「オブジェクト」への思弁的関心とデザイン
- 6 諸星大二郎と人類学的関心 (1) 漢字文化圏を掘り下げる
- 7 諸星大二郎と人類学的関心 (2) 『マッドメン』と神話の構造分析
- 8 人類の暴力と投擲：『寄生獣』とは誰か
- 9 ジブリアニメと「日本」：『もののけ姫』（宮崎駿）と『鳥獣戯画』起源説（高畑勲）の限界を考える
- 10 民衆芸術と消費文化
- 11 現代日本の創作における人類学的想像力：上橋菜穂子と都留泰作
- 12 装飾をめぐって：造形の「エッジ」と「テリトリー」
- 13 石子順造の仕事：先史性、キッチュ、マンガ
- 14 創造行為とイメージの分析
- 15 まとめ：文化の無底性に向き合うこと

定期試験は実施しない。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

以下に挙げる「参考文献（作品）」のいくつかに予め触れておくことが望ましい。その上で講義をふまえ、レポート課題に取り組んでほしい。

■成績評価の方法

平常点＋コメントペーパー40%、レポート60%

■成績評価の基準

到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。芸術文化学研究科（博士課程）の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書

なし、ただし参考文献・作品のいずれかに触れておくこと

□テキスト

-

□参考文献（作品等）

石岡良治『「超」批評 視覚文化×マンガ』青土社
ウィルヘルム・ヴォリンガー（中野勇訳）『ゴシック美術形式論』文春学藝ライブラリーの石岡良治による解題
石子順造『キッチュノマンガ』小学館クリエイティブ
諸星大二郎『妖怪ハンター』『暗黒神話』『マッドメン』
岩明均『寄生獣』『七夕の国』『ヒストリエ』
都留泰作『ナチュン』『ムシヌユン』
上橋菜穂子『精霊の守り人』
宮崎駿『もののけ姫』『千と千尋の神隠し』
高畑勲『平成狸合戦ぽんぽこ』『十二世紀のアニメーション』

□参考資料

-

90253	比較民俗学研究A	2単位 前期	1・2	講義	吉川 秀樹 (非)
-------	----------	-----------	-----	----	-----------

■テーマ

人類学の視点からのartやperforming artの研究

■授業の概要

Anthropology、Art、そしてPerforming Artの特別な関係 Part I

伝統的に非西洋の文化を研究してきた人類学ではあるが、非西洋の「art」や「performing art」は、研究の対象として、また新たな理論、研究方法（研究成果の提示法も含めて）を生み出すインスピレーションとして常に特別な存在であり続けてきた。例えば審美性 (aesthetics)、感情 (emotions)、感受性 (sensitivity)、創造性 (creativity) という異文化研究において方法論上扱いにくい領域に人類学を踏み込ませた。また多くの非西洋文化／社会において精神構造やコスモロジーや社会構造と密接な関係にあるartやperforming artが、colonization やglobalizationを通して、西洋の文化／社会に移行することにより、どのような新たな意味や価値等が与えられるか、すなわち異文化／社会間のappropriationの分析に人類学を向かわせた。さらには、人類学におけるlogocentric (文字中心) な研究成果の提示法にも疑問を投げかけ、映像人類学 (visual anthropology) 等の分野の確立へと繋がっていった。そして人類学におけるartやperforming artの研究は、西洋文化／社会のartやperforming artの再検証にも影響を与えている。

この授業では、artやperforming artを人類学的視点から研究／分析した英語の論文を読み、様々な文化／社会におけるartやperforming artについて、そしてartやperforming artと人類学の関係について考察していく。同時に、大学院レベルで英語の論文を講読するに必要な英語力やスキルを習得していく。

■到達目標

- ・異文化／社会におけるartやperforming art (と分類されるもの) の存在に注目し、その多様性、ならびに共通点や相違点を理解する。
- ・Artやperforming artの人類学的研究の視点、理論、方法について学び、artやperforming artと人類学の関係について考察する。
- ・研究における英語の論文の講読に必要な英語力やスキルを習得し、向上させる。
- ・学生が各自持つartやperforming artに対するアプローチ／専門性の特徴を、人類学のアプローチとの比較を通して、理解する

■授業計画・方法

授業は、講読する論文についてのクラス・ディスカッションを中心に行われる。学生はディスカッションのための「レジュメ」の準備をすること。また各論文を読み始めるにあたり、パワーポイントや資料を使って文化／社会的背景の説明が教員により行われる。

- 1 “Primitive Art” by Franz Boas (1955) in AA, “Split Representation in the Art of Asia and America” by Claude Levi-Strauss (1963) in AA, “Singing the Rug: Patterned Textiles and the Origins of Indo-European Metrical Poetry” by Anthony Tuck (2006) in AP.
- 2 同上
- 3 同上
- 4 同上
- 5 同上
- 6 同上

機能 (functions)、意味 (meaning)、社会／文化的背景 (socio-cultural context)

- 7 Sacred Art and Spiritual Power: An Analysis of Tlingit Shamans’ Masks” by Aldona Jonaitis (1982) in AA, “Modernity and the ‘Graphicalization of Meaning New Guinea Highland Shield Design in Historical Perspective” by Michael O’ Hanlon (1995) in AA, or “Performance and the cultural Construction of Reality” by Edward Schieffelin (1985) in AP.
- 8 同上
- 9 同上
- 10 同上
- 11 異文化と審美性 (aesthetics)
“Yoruba Artistic Criticism” by Robert Farris Thompson (1973) in AA, “From Dull to Brilliant: The Aesthetics of Spiritual Power among the Yoruba (1992) in AA, or “What They Came With: Carnival and the Persistence of African Performance Aesthetics in the Diaspora” (2007) by Esiaba Irobi in AP.
- 12 同上

13 同上

14 同上

15 同上、まとめ

※ 定期試験は実施しない。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

授業におけるディスカッションを充実させるには、そのための準備をきちんと行うことが不可欠である。論文講読で分担された部分を訳し、その内容の要約やコメント／質問等を書いたレジメを準備しディスカッションに臨むこと。分担については授業のなかで学生と教員で決める。

■成績評価の方法

* クラス・ディスカッションの内容（レジメと発言）	70%
** 短評（article review）	20%
** 短評についてのプレゼンテーション	10%
合計	100%

■成績評価の基準

到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書

The Anthropology of Art: A Reader (2002), Howard Morphy and Morgan Perkins eds., Blackwell Publishing.
The Anthropology of Performance: A Reader (2013), Frank J. Korom ed., Willey-Blackwell.
以上から選出した論文や章を教科書とする。授業計画を参照すること。
なおThe Anthropology of Art: A ReaderはAA、The Anthropology of PerformanceはAPと表記している。

□テキスト

なし

□参考文献（作品等）

Sociology of the Arts: Exploring Fine and Popular Forms
(2003, Victoria D. Alexander, Blackwell Publishing).
In Praise of Commercial Culture (1998, Tyler Cowen, Princeton University Press).

□参考資料

—

90254	比較民俗学研究B	2単位 後期	1・2	講義	吉川 秀樹 (非)
-------	----------	-----------	-----	----	-----------

■テーマ

人類学の視点からのartやperforming artの研究

■授業の概要

Anthropology、Art、そしてPerforming Artの特別な関係 Part II

伝統的に非西洋の文化を研究してきた人類学ではあるが、非西洋の「art」や「performing art」は、研究の対象として、また新たな理論、研究方法（研究成果の提示法も含めて）を生み出すインスピレーションとして常に特別な存在であり続けてきた。例えば審美性 (aesthetics)、感情 (emotions)、感受性 (sensitivity)、創造性 (creativity) という異文化／社会研究において方法論上扱いにくい領域に人類学を踏み込ませた。また多くの非西洋文化／社会において精神構造やコスモロジーや社会構造と密接な関係にあるartやperforming artが、colonization やglobalizationを通して、西洋の文化／社会に移行することにより、どのような新たな意味や価値等が与えられるか、すなわち異文化／社会間のappropriationの分析に人類学を向かわせた。さらには、人類学におけるlogocentric (文字中心)な研究成果の提示法にも疑問を投げかけ、映像人類学 (visual anthropology) 等の分野の確立へと繋がっていった。そして人類学におけるartやperforming artの研究は、西洋文化／社会のartやperforming artの再検証にも影響を与えている。

この授業では、artやperforming artを人類学的視点から研究／分析した英語の論文を読み、様々な文化／社会におけるartやperforming artについて、そしてartやperforming artと人類学の関係について考察していく。同時に、大学院レベルで英語の論文を講読するに必要な英語力やスキルを習得していく。

■到達目標

- ・異文化／社会におけるartやperforming art (と分類されるもの) の存在に注目し、その多様性、ならびに共通点や相違点を理解する。
- ・Artやperforming artの人類学的研究の視点、理論、方法について学び、artやperforming artと人類学の関係について考察する。
- ・研究における英語の論文の講読に必要な英語力やスキルを習得し、向上させる。4) 学生が各自持つartやperforming artに対するアプローチ／専門性の特徴を、人類学のアプローチとの比較を通して、理解する。

■授業計画・方法

授業は、講読する論文についてのクラス・ディスカッションを中心に行われる。学生はディスカッションのための「レジュメ」の準備をすること。また各論文を読み始めるにあたり、パワーポイントや資料を使って文化／社会的背景の説明が教員により行われる。

- 1 西洋という場所におけるNon-Western “Art” and “Performing Art”
“Introduction to Art/Artifact: African Art in Anthropology Collections” by Susan Vogel (1988) in AA,
“Oriental Antiquities/Far Eastern Art” by Craing Clunas (1997) in AA, or “What They Came With: Carnival and the Persistence of African Performance Aesthetics in the Diaspora” (2007) by Esiaba Irobi in AP

2 同上

3 同上

4 同上

5 同上

ArtとPerforming ArtとAppropriation そして商品化 (commodification)

- 6 “The Collecting and Display of Souvenir Arts: Authenticity and the “Strictly Commercial” by Ruth B. Phillips (1998) in AA or “Representing History: Performing the Columbian Exposition” (2002) by Rosemarie Bank in AP.

7 同上

8 同上

9 同上

10 同上

アート (art) とアーティスト (artist) と人類学 (anthropology) の新しい関係

- 11 “Artists in the Filed: Between Art and Anthropology” by Fernando Calzadilla and George E. Marcus in CAA (2006), or “Shadows of Song: Exploring Research and Performance Strategies in Yolngu Women’s Crying-songs” (2002) by Fiona Magowan in AP.

- 12 同上
- 13 同上
- 14 同上
- 15 同上、まとめ

※ 定期試験は実施しない。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

授業におけるディスカッションを充実させるには、そのための準備をきちんと行うことが不可欠である。論文講読で分担された部分を訳し、その内容の要約やコメント／質問等を書いたレジメを準備しディスカッションに臨むこと。分担については授業のなかで学生と教員で決める。

■成績評価の方法

* クラス・ディスカッションの内容（レジメと発言） 70%
* * 短評（article review） 20%
* * 短評についてのプレゼンテーション 10%
合計 100%

■成績評価の基準

到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書

The Anthropology of Art: A Reader (2002) Howard Morphy and Morgan Perkins eds., Blackwell Publishing.
Contemporary Art and Anthropology (2006) Arnd Schneider and Christopher Wright eds., Berg.
The Anthropology of Performance: A Reader (2013), Frank J. Korom ed., Willey-Blackwell.
以上から選出した論文や章を教科書とする。授業計画を参照すること。なおThe Anthropology of Art: A ReaderはAA、Contemporary Art and Anthropology はCAA, The Anthropology of PerformanceはAP と表記している。

□テキスト

なし

□参考文献（作品等）

Sociology of the Arts: Exploring Fine and Popular Forms
(2003, Victoria D. Alexander, Blackwell Publishing).
In Praise of Commercial Culture (1998, Tyler Cowen, Princeton University Press).

□参考資料

—

90238	東洋工芸史研究 (奇数年度開講)	4単位 通年	1・2	講義	柳 悦州(客)
-------	---------------------	-----------	-----	----	---------

■テーマ

染織を通して東洋工芸の特質と意義を明らかにする。

■授業の概要

織物を織ることは、人びとの生活と密接に関わってきた。この授業では、沖縄とラオスやシルクロード沿い諸国の織機構造や染織技術について、歴史的変遷や文化的背景を視野に入れながら検討しながら、東洋の工芸の特質と意義について研究していく

■到達目標

- ・東洋における工芸は、時代とともに変化していくことが説明できる。
- ・東洋の美意識について理解し説明できるようになる。

■授業計画・方法

前期は染織の基礎概念について確認し、日本以外の東洋の染織について検討する。後期は日本・沖縄の染織と東洋の美意識について検討する。

1 ガイダンス	16 日本の織物（江戸時代）
2 織物素材	17 日本の織物（江戸時代後期）
3 糸を製作する方法（苧麻、綿）	18 日本の織物（明治～戦前）
4 糸を製作する方法（絹、羊毛）	19 沖縄の織物（王朝時代）
5 織機	20 沖縄の織物（明治～戦前）
6 経糸の整経方式	21 沖縄の織物（戦後）
7 織機の機能と構造	22 奄美の織物
8 織機の歴史的変遷	23 沖縄の腰機と紋織
9 東洋の織機の特徴	24 沖縄の絣
10 産業革命	25 沖縄の緯絣
11 ジャポニズム	26 本土と沖縄の絣
12 ラオスの織物（平地ラオ族）	27 西洋の美意識、日本の美意識
13 ラオスの織物（山地少数民族）	28 沖縄の美意識
14 イラン、ウズベキスタンの染織	29 戦後沖縄の工芸と美意識
15 トルコ、シリアの織物	30 まとめ

定期試験は実施しない。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

織物と織物技術に関する基礎的な知識が必要である。

■成績評価の方法

平常点(50%)とレポート(50%)による総合評価

■成績評価の基準

到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献（資料）等

教科書

特になし

テキスト

特になし

参考文献（作品等）

特になし

参考資料

特になし

90220	西洋音楽史研究	4 単位 通年	1・2	講義	向井 大策
-------	---------	------------	-----	----	-------

■テーマ

作曲家の個人様式と時代様式の関係について考察する。

■授業の概要

クロード・ドビュッシー（1862～1918）とモーリス・ラヴェル（1875～1937）のピアノ音楽や管弦楽曲、歌曲、室内楽曲などをとりあげ、この両作曲家の個人様式の共通性と違いを、楽曲分析と美学的な背景に関する考察を通して明らかにする。とりわけ、このふたりの作曲家が、文学・絵画などの音楽以外の分野との「照応（コレスポンダンス）」を通じ、どのようにして独自の音楽様式を確立していったかを、「ベル・エポック」と呼ばれた、この時代特有の文化的背景を通して考察したい。

■到達目標

- ・和声やテクスチュアの面において複雑な面をもつドビュッシーとラヴェルの音楽を分析的な観点から理解する。
- ・ドビュッシーとラヴェルが独自の音楽様式を確立するに至った、文化的・美学的な背景について理解する。
- ・ドビュッシーとラヴェルの個人様式を把握することで、作品研究や演奏解釈の手がかりをつかむ。

■授業計画・方法

講義形式の解説と分析を中心にしつつ、参加者の構成を見ながら、参加者による研究発表等の機会も交え、両作曲家の音楽への理解を実践的に深めていきたい（したがって、以下の授業計画は、参加者の構成によって変更される可能性もある）。

1 導入	16 後期の導入
2 ドビュッシー、ラヴェルとその時代 概説 (1)	17 ドビュッシーとラヴェルの歌曲の分析 (1)
3 ドビュッシー、ラヴェルとその時代 概説 (2)	18 ドビュッシーとラヴェルの歌曲の分析 (2)
4 ドビュッシーのピアノ音楽の分析 (1)	19 参加者の研究発表 (6)
5 ドビュッシーのピアノ音楽の分析 (2)	20 参加者の研究発表 (7)
6 参加者の研究発表 (1)	21 ドビュッシーとラヴェルの室内楽曲の分析 (1)
7 参加者の研究発表 (2)	22 ドビュッシーとラヴェルの室内楽曲の分析 (2)
8 ドビュッシーの管弦楽曲の分析 (1)	23 参加者の研究発表 (8)
9 ドビュッシーの管弦楽曲の分析 (2)	24 参加者の研究発表 (9)
10 参加者の研究発表 (3)	25 ラヴェルの管弦楽曲の分析 (1)
11 参加者の研究発表 (4)	26 ラヴェルの管弦楽曲の分析 (2)
12 ラヴェルのピアノ音楽の分析 (1)	27 参加者の研究発表 (10)
13 ラヴェルのピアノ音楽の分析 (2)	28 参加者の研究発表 (11)
14 参加者の研究発表 (5)	29 ドビュッシーとラヴェルの音楽様式——差異と共通性
15 参加者の研究発表 (6) / 前期のまとめ。定期試験は実施しない。	30 まとめ。定期試験は実施しない。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

- ・講義や研究発表でとりあげられる作品については、可能な限り、楽譜を準備すること。
- ・それぞれの回でとりあげられる作品については、事前に観賞し、概要を把握しておくこと。
- ・講義でとりあげる内容をより深く理解するために、以下に紹介する参考文献を、授業と平行して読み込んでいくことが望ましい。

■成績評価の方法

- ・平常点 50%
- ・研究発表 30%
- ・期末レポート（前期・後期各1回ずつ） 20%

■成績評価の基準

到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書

教員が配布。

□テキスト

教員が配布。

□参考文献（作品等）

松橋麻利『ドビュッシー』（音楽之友社 作曲家・人と作品シリーズ）

井上さつき『ラヴェル』井上さつき訳（音楽之友社 作曲家・人と作品シリーズ）

□参考資料

-

90221	日本音楽史研究	4単位 通年	1・2	講義	高瀬 澄子
-------	---------	-----------	-----	----	-------

■テーマ

日本音楽の歴史的研究

■授業の概要

日本音楽の歴史的研究に関する文献を講読する。講読する文献には、東アジアの周辺地域（中国や琉球）の音楽に関する文献も含まれる。

■到達目標

- ・日本音楽の歴史的研究に関する様々な方法や問題を理解していること。
- ・授業の中から課題を見出し、授業で学んだ方法を用いて自ら研究できるようになること。

■授業計画・方法

令和3年度は、江戸時代の一節切尺八・箏・三味線の独習書として知られる『糸竹初心集』（中村宗三、1664）を取り上げる。

1 導入	16 導入
2 文献の講読 1	17 文献の講読 1
3 文献の講読 2	18 文献の講読 2
4 文献の講読 3	19 文献の講読 3
5 文献の講読 4	20 文献の講読 4
6 口頭発表 1	21 口頭発表 1
7 文献の講読 5	22 文献の講読 5
8 文献の講読 6	23 文献の講読 6
9 文献の講読 7	24 文献の講読 7
10 口頭発表 2	25 口頭発表 2
11 文献の講読 8	26 文献の講読 8
12 文献の講読 9	27 文献の講読 9
13 文献の講読10	28 文献の講読10
14 口頭発表 3	29 口頭発表 3
15 総括	30 総括

定期試験は実施しない。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

- ・毎回の授業にて、日本史年号の復唱と簡単なくずし字の演習を行うので、予習しておくこと。
- ・古文漢文の辞書を持参すること（電子辞書でもよい）。
- ・文献はあらかじめ読んでおき、わからない用語や歴史的背景などを調べておくこと。
- ・講読の状況に応じて、授業中に小さな課題を与えることがある。
- ・授業時間の範囲内で1コマ程度、学外の図書館等での実習を行うことがある。

■成績評価の方法

平常点（50%）、学期末レポート（50%）。平常点は、授業への参加状況、授業中の課題や口頭発表などを評価する。

■成績評価の基準

到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。
芸術文化学研究科（博士課程）の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書

適宜プリントを配布する。

□テキスト

適宜プリントを配布する。

□参考文献（作品等）

浅野健二他監修『日本歌謡研究資料集成 第3巻 糸竹初心集 糸竹大全 糸竹古今集』勉誠社、1978年。

□参考資料

—

90223	民族音楽学研究	4 単位 通年	1・2	講義	小西 潤子
-------	---------	------------	-----	----	-------

■テーマ

グローバル社会における音楽芸能について理解する

■授業の概要

応用音楽学の考え方について学んだうえで「グローバル社会における沖縄芸能」を大テーマ、「社会」「環境」「学校教育」「地域社会」「文化行政」「国際社会」をトピックスとし、沖縄を含めたアジア太平洋地域の音楽芸能パフォーマンスに関する文献講読および事例研究を行う。これにより、民族音楽学研究の動向を知り、自らが課題を見出して取り組む力を身につける。

■到達目標

- ・民族音楽学研究の動向を知り、自らの研究課題と関連付けて理解する。
- ・民族音楽学に関する英語文献を読む力を向上する。
- ・民族音楽学の課題について、論理的に記述し口頭で的確に説明することができる。

■授業計画・方法

1 民族音楽学の研究動向①	16 音楽芸能と地域社会①
2 民族音楽学の研究動向②	17 音楽芸能と地域社会②
3 民族音楽学の研究動向③	18 音楽芸能と地域社会③
4 民族音楽学の研究動向④	19 音楽芸能と地域社会④
5 音楽芸能と社会①	20 音楽芸能と地域社会⑤
6 音楽芸能と社会②	21 音楽芸能と文化行政①
7 音楽芸能と社会③	22 音楽芸能と文化行政②
8 音楽芸能と社会④	23 音楽芸能と文化行政③
9 音楽芸能と社会⑤	24 国際社会における音楽芸能公演①
10 音楽芸能と環境①	25 国際社会における音楽芸能公演②
11 音楽芸能と環境②	26 国際社会における音楽芸能公演③
12 音楽芸能と環境③	27 国際社会における音楽芸能公演④
13 学校教育と音楽①	28 国際社会における音楽芸能公演⑤
14 学校教育と音楽②	29 国際社会における音楽芸能公演⑥
15 前期総括	30 総括 定期試験は実施しない。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

- ・図書館や音楽資料室所蔵の関連文献、音源・映像資料を利用して、各自授業の予習・復習をすること。
- ・英語文献の講読二際しては、内容理解に必要な予習・復習を徹底すること。
- ・積極的な発言や質問をすること。

■成績評価の方法

- ・授業への取り組み（60%）、期末レポート（40%）
- ・学習意欲や主体的な取り組みが見られるか。
- ・理解が深まるとともに、自らの課題を見いだし解決する力がついたか。

■成績評価の基準

到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。
芸術文化学研究科（博士課程）の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書

教員の指示による。

□テキスト

教員の指示による。

参考文献（作品等）
教員の指示による。

参考資料

—

90224	琉球音楽論研究	4単位 通年	1・2	講義	遠藤 美奈
-------	---------	-----------	-----	----	-------

■テーマ

琉球古典音楽の理論と研究方法

■授業の概要

前期は、琉球古典音楽の構造理論について、楽譜分析と音響分析の両面から明らかにする。楽譜（工工四）について、書誌的、歴史的、音楽論的な問題を検討することによって、古い伝承を正しく理解し、あるいは現代の演奏を批判的に考察する。後期は、その応用としてこれまでの琉球古典音楽の研究手法を援用して実際に分析等を行い、自らの演奏理論や研究の基礎を身につける。

■到達目標

- ・古典音楽の構造理論と作曲方法を理解すること。
- ・多様な研究手法から適切なアプローチができる方法を選び、分析ができるようになること。

■授業計画・方法

1 ガイダンス	16 舞踊作品の音楽
2 工工四の諸問題	17 組踊の音楽
3 歌三線の音組織	18 八重山の三線音楽
4 歌三線の旋律形式	19 琉球古典音楽研究へのアプローチ 総論
5 《かぎやで風》の分析	20 琉球古典音楽研究へのアプローチ 声楽譜とその研究①
6 御前風様式の音楽構造	21 琉球古典音楽研究へのアプローチ 声楽譜とその研究②
7 昔節の音楽構造	22 琉球古典音楽研究へのアプローチ 発声法
8 早間・本間・長間について	23 琉球古典音楽研究へのアプローチ 伝承論
9 本間の楽曲を理解する①	24 琉球古典音楽の分析① 楽譜分析
10 本間の楽曲を理解する②	25 琉球古典音楽の分析② 楽譜分析
11 長間の楽曲を理解する①	26 分析結果についてまとめ
12 長間の楽曲を理解する②	27 琉球古典音楽の分析③ 音響分析
13 早間の楽曲を理解する	28 琉球古典音楽の分析④ 音響分析
14 アゲとサゲの技法について	29 分析結果についてまとめ
15 まとめ（中間）	30 まとめ

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

- ・楽譜を読み解くために自らの手で様々な形に変換させる。そのため工工四のみならず、五線譜でも適切な表記ができるようにしておくこと。
- ・後期では、授業内で分析を行うが自習課題の確実な実施が肝要である。

■成績評価の方法

自習課題の確実な実施：20%
前期の簡易レポート：30%
後期末の分析結果のまとめ：50%

■成績評価の基準

到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。
芸術文化学研究科（博士課程）の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書

金城厚『沖縄音楽の構造-歌詞のリズムと楽式の理論-』第一書房
大瀧清之『琉球古典音楽の表層』アドバイザー

□テキスト

教員の指示による。

□参考文献（作品等）

教員の指示による。

参考資料

-

90225	民族舞踊学研究	4単位 通年	1・2	講義	呉屋 淳子
-------	---------	-----------	-----	----	-------

■テーマ

パフォーマンス研究を通じて、民族舞踊について理論的、創造的視点から学ぶ。

■授業の概要

本講義では、リチャード・シェクナーの唱える「パフォーマンス」観を通して、「パフォーマンス・アーツ」「日常生活におけるパフォーマンス」「文化的パフォーマンス」について考察し、現代社会における舞台芸術について理解を深める。

■到達目標

文献講読とディスカッションを通して、舞台芸術としての「パフォーマンス」の概念について理解することができる。現代社会における民族舞踊を取り巻く支配的言説に対して、新たな価値観を発信していくことができる。

■授業計画・方法

1 ガイダンス、「批判的理論とパフォーマンス」	16 「パフォーマンスとアイデンティティ」 (1)
2 「文化的パフォーマンス」 (1)	17 「パフォーマンスとアイデンティティ」 (2)
3 「文化的パフォーマンス」 (2)	18 「パフォーマンス研究」 (1)
4 演劇と文化人類学 (1)	19 「パフォーマンス研究」 (2)
5 演劇と文化人類学 (2)	20 争われる戦争の記憶--「エラノ・ゲイ」「昭和館」と嶋田美子 (1)
6 エスノグラフィー (1)	21 争われる戦争の記憶--「エラノ・ゲイ」「昭和館」と嶋田美子 (2)
7 エスノグラフィー (2)	22 アメリカ「発見」の逆民族誌的パフォーマンス (1)
8 身体 (1)	23 アメリカ「発見」の逆民族誌的パフォーマンス (2)
9 身体 (2)	24 オリンピックと開会式と国民国家 (1)
10 ミュージアムと展示 (1)	25 オリンピックと開会式と国民国家 (2)
11 ミュージアムと展示 (2)	26 東京の『ミス・サイゴン』--観客の作り方と作られ方 (1)
12 ジェンダー (1)	27 東京の『ミス・サイゴン』--観客の作り方と作られ方 (2)
13 ジェンダー (2)	28 介入への実践を目指して
14 ロール・プレイング (1)	29 映像研究 (1)
15 ロール・プレイング (2)	30 映像研究 (2)

状況に応じてシラバスの内容を一部変更をする場合がある。

■履修上の留意点 (授業以外の学習方法を含む)

教科書は必ず購入し、各回の授業終了時に指示するページを十分に読み込んでおくこと。教科書や参考文献、授業で紹介する文献以外にも、パフォーマンス研究に関する文献を積極的に読むこと。

■成績評価の方法

レジュメおよびレポート (60%)、講義の取り組み方 (40%) で総合評価する。

■成績評価の基準

到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献 (資料) 等

□教科書

-

□テキスト

教員の指示による。

□参考文献（作品等）

高橋雄一郎 2011 『パフォーマンス研究のキーワード--批判的カルチュラル・スタディーズ入門』世界思想社

高橋雄一郎 2005 『身体化される知--パフォーマンス研究』せりか書房

リチャード・シェクナー 1998 『パフォーマンス研究：演劇と文化人類学の出会いの場所』高橋雄一郎訳、人文書院。

京都造形大学舞台芸術研究センター 2005 『舞台芸術』（8）、月曜社

Victor Turner 2001 *The Anthropology of Performance*, New York: PAJ Publications.

□参考資料

-

90226	民俗芸能論研究	4単位 通年	1・2	講義	久万田 晋
-------	---------	-----------	-----	----	-------

■テーマ

日本・沖縄の民俗芸能研究を学説史的に検討する。

■授業の概要

沖縄の民俗芸能を、民俗文化全体にわたる視野の中で把握するために、日本・沖縄の民俗芸能研究を学説史的に検討する。あわせて県内の祭祀・民俗芸能に関するフィールドワークを行い、人々の生活と係わり、音楽・舞踊・演劇・文学的局面等、総合的な観点からの理解を目指し、共同研究を行う。

■到達目標

- ・沖縄各地の民俗芸能の様態を、各地の社会状況や近現代史における変遷を含めて把握する。
- ・それと同様に古典芸能、大衆芸能との相互関連性についての理解を得る。

■授業計画・方法

1 文献購読 基本概念、分類、成立史	16 沖縄・奄美の民俗芸能の展開 地域各論
2 同上	17 同上
3 同上	18 同上
4 同上	19 同上
5 同上	20 同上
6 日本本土の民俗芸能の概説 神楽、田楽、風流、その他	21 民俗芸能の現代的展開 イベント・創作芸能、海外への展開
7 同上	22 同上
8 同上	23 同上
9 同上	24 同上
10 同上	25 同上
11 沖縄・奄美の民俗芸能の概説 神祭り、白太鼓、エイサー、村踊り等	26 受講生のレポートに向けての発表と質疑応答
12 同上	27 同上
13 同上	28 同上
14 同上	29 同上
15 同上	30 同上

定期試験は実施しない。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

- ・沖縄文化や琉球芸能全般に関する基礎知識を持つことが望ましい。

■成績評価の方法

日頃の出席状況・授業態度にレポートの採点を加味して評価する。

■成績評価の基準

「到達目標」を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。芸術文化学研究科（博士課程）の学生には、専門家としての独創的かつ学術的な達成を求める。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書

-

□テキスト

-

□参考文献（作品等）

久万田晋『沖縄の民俗芸能―神祭り、白太鼓からエイサーまで』（ボーダーインク、2011年）

□参考資料

-

90227	琉球楽劇論研究	4 単位 通年	1・2	講義	鈴木 耕太
-------	---------	------------	-----	----	-------

■テーマ

琉球の楽劇である組踊を総合的に考える。

■授業の概要

琉球芸能の中から、おもに組踊について総合的に学習する。琉球芸能史の中から組踊上演以前の芸能の歴史、組踊の上演された歴史（概説）を踏まえたうえで、組踊に影響を与えた芸能・文学を検討する。そして、組踊という芸能のもつ表現や約束事、様式などを、歴史資料と組踊の詞章を通して学習する。

■到達目標

- ・組踊の上演を通史的に理解することができる。
- ・近世における組踊上演の空間および状況を把握することができる。

■授業計画・方法

組踊について総合的に研究する。テキスト講読・映像鑑賞・近世資料などを用いて講義を行う。

- | | |
|------------------------------------|------------------------------------|
| 1 冊封使録関係資料にみえる、組踊誕生前の冊封芸能史について | 16 近世における御冠船芸能の舞台空間 |
| 2 組踊上演の歴史について・現存する組踊についての概説 | 17 近世における衣裳について |
| 3 「執心鐘入」の詞章分析『琉球戯曲集』53～61頁 | 18 「執心鐘入」の演出研究 I |
| 4 「執心鐘入」の詞章分析『琉球戯曲集』62～69頁 | 19 「執心鐘入」の演出研究 II |
| 5 「執心鐘入」の詞章分析『琉球戯曲集』69～76頁 | 20 「二童敵討」の演出研究 |
| 6 「執心鐘入」の詞章分析『琉球戯曲集』76～88頁 | 21 「銘苺子」の演出研究 |
| 7 「執心鐘入」の詞章分析のまとめ | 22 田里朝直作品の演出研究 |
| 8 組踊の仇討物とジャンルについて | 23 「大川敵討」の演出研究 |
| 9 「二童敵討」の詞章分析『琉球戯曲集』22～30頁 | 24 組踊と音曲 I |
| 10 「二童敵討」の詞章分析『琉球戯曲集』31～40頁 | 25 組踊と音曲 II |
| 11 「二童敵討」の詞章分析『琉球戯曲集』40～50頁 | 26 「執心鐘入」演出の違い（琉球政府時代） |
| 12 「二童敵討」の詞章分析のまとめ | 27 「執心鐘入」演出の違い（2010年代） |
| 13 玉城朝薫の組踊と田里朝直の組踊の詞章について | 28 組踊の台本と演出について |
| 14 田里朝直以降の組踊の詞章について | 29 組踊の創作・新作について |
| 15 前期の解説・まとめ（これまでの補足）
中間レポートの提出 | 30 後期の解説・まとめ（これまでの補足）
期末レポートの提出 |

※定期試験は実施しない。レポートを課す。

必要に応じてパソコンによるプレゼンテーション、板書、音楽、映像、その他様々な資料を利用して講義を進める。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

履修にあたって、組踊の台本をあらかじめ音読できるようにしておくことが望ましい。予習として折口信夫の論文「組踊り以前」（『校注 琉球戯曲集』所収）を読んでおくこと。また、『校注 琉球戯曲集』所収の「執心鐘入」「護佐丸敵討」を読んでおくこと。

■成績評価の方法

中間・期末課題（60%）、講義への参加度（講義内での発言、リアクションペーパー、小課題など）（40%）で評価する。

■成績評価の基準

到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書

講義用レジュメや資料を配布する。

□テキスト

参考文献の中から適宜使用する。

□参考文献（作品等）

伊波普猷『校注 琉球戯曲集』（榕樹書林1992年）国立劇場おきなわ編『琉球・沖縄芸能史年表』（古琉球～近代編）（国立劇場おきなわ2010年）矢野輝雄『組踊への招待』（琉球新報社2001年）矢野輝雄『組踊を聴く』（瑞木書房2003年）

□参考資料

国立国語研究所『沖縄語辞典』（1963年・大蔵省印刷局）沖縄古語辞典編集委員会編『沖縄古語大辞典』（1995年・角川書店）

90239	楽曲分析研究B	2単位 後期	1・2	講義	○土井智恵子、塚本一実、村田昌己（非）
-------	---------	-----------	-----	----	---------------------

■テーマ

様々なスタイル、音楽語法について研究し、演奏に結び付ける分析力を養う。

■授業の概要

- ・19世紀後半の主に印象派以降の和声語法、作曲技法、歴史背景について代表作品を選曲し分析を行う。
- ・各回の受講者の予習を基にゼミ形式で考察を深める。

■到達目標

- ・機能と和声から発展させた和声語法、限定移調技法（M.T.L）などについて分析する。
- ・音楽史上の潮流に区分して特徴を聴き分け、作品研究を行う。

■授業計画・方法

- 1 ガイダンス、履修生による希望分析楽曲、発表順などを決定する
- 2 印象主義音楽の和声語法
- 3 印象主義の声楽作品分析
- 4 印象主義の室内楽、管弦楽作品の分析
- 5 20世紀の潮流について
- 6 新古典主義音楽作品の分析
- 7 新古典主義の管弦楽作品の分析
- 8 神秘主義、その他の作品の分析
- 9 バルトークの作品
- 10 ストラヴィンスキーの作品
- 11 無調への流れ
- 12 12音主義への変遷と室内楽作品
- 13 現代音楽の様々な潮流
- 14 新しい調性感
- 15 まとめ(定期試験は実施しない。)

具体的な曲目については、初回ガイダンスで履修生と調整し決定する。各回の楽譜は履修生が用意する。入手困難な楽譜については担当教員が配布する。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

履修生は各楽曲の楽譜を用意し、授業前に予習して臨むこと。

■成績評価の方法

平常点70%、レポートの提出等30%の配点比で総合的に評価する。

■成績評価の基準

到達目標を観点として、履修規定に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書

「楽式論」石桁眞礼生著(音楽之友社)他、教員の指示による。

□テキスト

「印象派以降」柴田南雄著（音楽之友社）他、教員の指示による。

□参考文献（作品等）

「和声の変貌」エドモン・コステール著（音楽之友社）、「無調音楽の構造」A. フォート著（音楽之友社）

□参考資料

-

90241	芸術学研究	2単位 通年	1・2	講義	長嶺 亮子（非）
-------	-------	-----------	-----	----	----------

■テーマ

「芸術」を言葉で記す方法を身につける。

■授業の概要

学術論文を書く上で必要な、先行研究資料の検索と入手の方法、論文中での参考資料の提示方法、論文の構成方法といった基本ルールを学ぶ。また、プレゼンテーションや作品解説といった、論文とは異なる「文章を簡潔にまとめる」方法を身につける。

■到達目標

論文執筆の基本ルールを理解した文章が書ける。

■授業計画・方法

芸術表現研究領域の学生を対象とする。授業は通年で15回とし、スケジュールと授業の具体的な内容は授業初めに履修生と打ち合わせた上で計画する。授業区分は「講義」だが、履修生による演習やディスカッションも適宜行なう。

- 1 インTRODクシヨン。授業内容と進行方法の説明。
- 2 先行研究資料の検索と入手方法1/論文とは
- 3 先行研究資料の検索と入手方法2/参考文献をまとめる
- 4 各種申請書の作成方法
- 5 文書ファイルの基本設定
- 6 参考文献・引用の提示方法1
- 7 参考文献・引用の提示方法2
- 8 論文の構成1
- 9 論文の構成2/文体
- 10 論文の構成3/論理的な文章
- 11 プレゼンテーション1
- 12 プレゼンテーション2
- 13 プレゼンテーション3
- 14 作品解説1
- 15 作品解説2

定期試験は実施しない。講義のほか、履修生による演習も適宜行なう。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

学内外の芸術および学術機関の情報やインターネットも活用し、各自の芸術実践に直接関わらないことも含めて多方面に意識を向けておくこと

■成績評価の方法

平常点60%、課題40%

■成績評価の基準

到達目標を観点として、履修規定に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献（資料）等

教科書

教科書は指定しない。必要に応じ授業毎にプリントを配付する。

テキスト

-

参考文献（作品等）

以下の文献を講読しておくことが望ましい。

小笠原喜康『大学生のためのレポート・論文術（講談社現代新書）』講談社、2002年。

東京藝術大学大学院音楽研究科リサーチセンター『芸術実践領域（実技系）学位論文作成マニュアル』東京藝術大学大学院音楽研究科リサーチセンター、2013年。

□参考資料

-